第一部

「冬の雅歌」
－句集「途上」より－

歌：伊藤香代子
詩：高原桐
曲：松村百合
琵琶：大上茜
横笛：松尾慧
チェロ：平賀香奈子

「花いかだ」
－ソプラノ、笙、箏のための－

歌：横山政美
詩：藤井慶子
曲：高橋久美子
笙：真鍋尚之
箏：てん・仁智

「かがやく季節に」

歌：加川文子
詩：伊豆裕子
曲：野村祐子
第一箏：野村祐子
第二箏：鈴川悦代
尺八：野村幹人

モノオペラ「与吉のオラショ」（前編）

歌：森田澄夫
台本：木下宣子
曲：池上眞吾
箏：池上眞吾
十七絃：平野裕子
笛：木村俊介
囃子：望月晴美

第二部

「春の日に」「野の花」

歌：鈴木房江
訳詩：なべくらますみ
原詩：呉世榮
曲：高橋通
箏：高橋澄子
太鼓（プク）：尹福美
木鉦：高橋通

「春愁（しゅんしゅう）」

歌：内田弘一郎
詩：佐久間郁子
曲：宮崎滋
笙：豊明日美
十七絃：小林真由子

「恋の堅田（かただ）」

歌：斉藤京子
詩：稲垣真藻
曲：常磐津文字兵衛
細棹三味線：東音田口拓
中棹三味線：常磐津紫緒
篠笛・能管：福原百貴

「春の宵」

歌：秋山恵美子
詩：高崎乃理子
曲：小森昭宏
尺八：米澤浩
箏：熊沢栄利子
打物：多田恵子

ごあいさつ

社団法人日本歌曲振興会副会長
中村綾子

本日はご多忙のところご来場頂きまして、まことに有り難う存じます。

私共の（社）日本歌曲振興会は「美しい日本語と香り高い歌を」をモットーと致しまして、詩人、作曲家、声楽家三部門が互いに協力し合い、新しい日本歌曲の創作と演奏、普及に努めてまいりました。

〈声楽と邦楽器の競演を基本とする、すべてが新作の声楽曲の発表〉という趣旨のもとにスタートしたこの「邦楽器とともに」の演奏会も、お蔭様で四回目を迎えることが出来ました。

伝統ある邦楽奏者の皆様方の、ひとかたならぬご協力があってこそ、このように開催出来ますことを、私共は感謝しております。

この新作歌曲が世界に広まりますようにとの願いをこめて、演奏させて頂きます。

何卒きびしいご批評と、これからも末永いご支援を賜りたく、心よりお願い申し上げます

【「第四回邦楽器とともに」実行委員】
中村綾子　木下宣子　千秋次郎　伊藤香代子
関根恵理子　高橋久美子　横山政美　和澤康代
森田澄夫（責任者）

作品解説

「冬の雅歌」―句集「途上」より―

私の故郷である能登を中心に雪国を慕った句を編み、その中のいくつかに新たな七五のリズムを添えて詩の世界を広やかに展開しました。この日本のリズムによって脈々と受け継がれてきた、移ろう四季の妙や生の有り様が、いま新たに歌曲となって輝きます。篠笛、琵琶、チェロによって、冬の能登の景色が一層鮮やかに描き出されることでしょう。あたかも雪国曼荼羅となり、聴く人の心の原風景になるよう願っています。［高原桐（詩）］

「花いかだ」―ソプラノ、笙、箏のための―

昨年春、京都の清水寺に参詣した折り、成就院庭園の中にある、小さな池のほとりに、たたずんで、その見事な花いかだを目にしたとたん、あまりの美しさに思わず息をのんだ。池の廻りのしだれ桜の花びらが、音もなくひらひらと舞い、池の面を桜色に染めてゆく。優雅なたたずまいの中で、散る様をしばし見とれていたひととき、想いは何時しか平安の世へと誘われて……この桜に彩られた、美しい池のほとりを、光君と紫上が手を取りあって、そぞろ歩きをしているような、錯覚にとらわれた。優雅な花いかだに魅せられ、白昼夢を見ているような一瞬であった。［藤井慶子（詩）］

「かがやく季節に」

季節の花や生き物を題材に生きる証を表現して、何気なく優しい言葉の奥に、熱い想いを託す伊豆裕子さんの詩。今回の詩には、親なら誰でも願う娘の幸せを題材にしていただきました。さわやかな季節に人生の旅路を語る親心、木洩れ日のなかを笑顔で歩く親子の姿を、私の箏の小曲の題名「緑の小路」にも絡ませた、深い気遣い。一見平明そうに見える言葉に秘められた思いやり、これは、彼女の人柄の表れでしょうか、滲み出る作者の人となりを想像したくなる作品です。［野村祐子（曲・箏）］

モノオペラ「与吉のオラショ」

昨夏念願叶い五島を訪れたとき、私は教会の多さに圧倒された。一見のどかなこの島でキリシタンへのあの凄惨な拷問が行なわれていたこと、それも明治の初頭までと考える時、歴史とは痛みの連続であるという言葉が心をよぎった。閉ざされた村で、人々は拷問する者とされる者、殉教する者と心ならずも転ぶ者になっていった。かくも美しい五島の教会群は生き延びた者の喜びと神への感謝であるとともに、信仰に殉じた者への懺悔の祈りの結実かもしれない。波間にオラショの声を聴きながら、ふとそう思った。本日の演奏は時間の都合上前半の短縮版である。全編完成後、リサイタルで全曲を取り上げる予定である。［森田澄夫（歌）］

「春の日に」「野の花」

邦楽器を使って歌曲を作るということにどんな意味があるのかを考えることが、この二つの曲の出発点であった。楽器の特性だけでなく、声や発声も考え、邦楽器という言葉に捕われることが無いようにし、詩も韓国語の訳詩を選んだ。「春の日に」の持つ雰囲気は、どこか大陸的である。大自然との対話のようなイメージを持つ曲を目指した。原詩が韓国語の詩であることを考え、打楽器は韓国民族楽器を使用することにした。「野の花」は、詩の内容に沿った分かりやすい曲想とし、日本語訳の持つ雰囲気を大切にした。二つの曲は続けて演奏される。［高橋通（曲）］

「春愁」

昨二〇〇八年の春、平城遷都千三百年を記念して奈良薬師寺金堂の日光菩薩・月光菩薩立像が史上初めて寺を離れ、東京国立博物館での歴史的な公開にいたりました。二体の感動的にして圧倒的な姿を讃え、同時に両菩薩を寺外へと送る僧侶らの愁いの念に思いを馳せた佐久間さんの詩に、宮崎が付曲した作。一千年を越える遥かな時の流れ、それを微塵のブレもなく深い瞑想の中で見つめつづけてきた如来と両菩薩、人知を超えた涅槃の境地、旅立ちの憂い。それらを笙と十七絃と柔和な男声ソロが慈しみ、祈る心が少しでも伝われればと願いました。［宮崎滋（作曲）］

「恋の堅田」

新田義貞は鎌倉に攻め入り、鎌倉幕府を滅亡させたことで、後醍醐天皇の建武政権に重要な位置を占める。ある日宮中に仕える勾当内侍を見初め胸を焦がす。二人の恋は首尾よく実るが、ライバル足利尊氏の言により、天皇は義貞に再起を言いふくめ、越前に落とす。斯波高経が勢力ふるう北国で、義貞は懸命に戦うが、ついに藤島の泥田のなかで額を弓に射ぬかれて絶命する。そうとは知らぬ勾当内侍は後を追い、琵琶湖のほとり堅田まできたところで戦死の報がとどき、悲しみに暮れた内侍は狂乱、琵琶湖に身を投げるという伝説に材を採った悲恋物語。［稲垣真藻（詩）］

「春の宵」

今までに「まつりうた」「炎上」を書きました。それぞれ、詩人の高崎乃理子さんに私から構想をお話して、詩を作っていただきました。「まつりうた」はほぼメロディー先行で、詩をあとからつけていただきました。「炎上」は娘道成寺の現代版を・・・という構想で書いていただきました。後で知ったのですが、「炎上」というのがコンピューターの用語のなかにあって、すべての機能がめちゃめちゃに壊れてしまうのが「炎上」なのだそうです。今年は詩人の高崎さんに、「なんでもお好きなものを書いてください」と申し上げてありまして、出来てきたのがこの「春の宵」です。歌は秋山恵美子さんという、大ヴェテランの登場です。皆さんに親しんでいただけるような、日本メロディーを作りたいと思ってこの「春の宵」を書きました。楽しんでいただけたら幸いです。［小森昭宏（曲）］